

2022年3月6日（日）主日朝礼拝説教

『命の木に至る道』井上隆晶牧師

創世記3章1～10節、22～24節、ヨハネ黙示録22章14～20節

## ①【罪の始まり】

教会にはいろんな人が救いを求めて来ますが、洗礼を受けても三分の一の人は信仰をやめてしまいます。それは自分が求めていた救いと違うからでしょう。貧困からの救い、病からの救い、災難や天災からの救い、暴君からの救い、人によって求める救いは様々でしょう。今日は創世記の人類の墮落の物語から救いとは何かについて学びたいと思います。

神様はエデンに園をもうけ、人間を連れて来て住ませ、食べるに良いあらゆる木を生え出でさせられました。園の中央には「命の木」と「善悪の知識の木」を生えさせ、人間に「**園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。**」（創世記2：17）と命じられました。これは歴史的事実でしょうか？または神話として読むべきでしょうか？3世紀のオリゲネスは「**アダムは個人の名ではなく人間を意味している**」といい、4世紀のニユッサのグレゴリオスは「**歴史であるよりは物語のかたちを借りた教義である**」といいました。つまりこれはアダムとエバという二人に起きた出来事であると同時に、全人類に今も起きています。あなたの物語であると読む必要があります。

ではこの園の中央にある二本の木は何を意味しているのでしょうか。教父たちはこう考えました。「食べる」とは「生きる」ということですから、「食べるな」とは「生きるな」ということになります。善悪の知識の木から食べるな、というのですから「**善悪の知識を手に入れて生きるという生き方をしてはならない。そういう生き方をすると必ず死んでしまう**」という意味になります。一方、聖書で「命」とは神のことですから、命の木から取って食べるとは「**神によって生きる生き方をしなさい**」という意味になります。神は人間に自由意志を与えたのですから、最初から神によって生きる生き方と、神から離れて生きる生き方の二つの生き方があったということを教えているのです。

ではなぜ人は神から離れたのかです。蛇が登場します。蛇は悪魔のかたどりとして用いられています。蛇がやってきて女にいいました。「**園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。**」（創世記3：1）神は「**園のすべての木から取って食べなさい**」と言われたのに、悪魔は神と反対の言葉を語ります。神は厳しい方であると思わせ、エバの心を動揺させ、神に対する信頼をなくさせるためです。エバは「**私たちは園の木の果実を食べても良いのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。**」（3：3）と答えます。前半の答えは正しいですが、神様は「触れてもいけない」などとは言っていませんし、彼女は

命の木も禁じられた木として入れてしまっています。だんだんと彼女の心が神を厳しい方だと思い始めたようです。そこで悪魔は「決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」(3:4~5)と断言します。「だいじょうぶよ、死なないわよ、あなた何も知らないのね。食べると神のようになれるのよ。自分と同じような者が現れるのが嫌で神はあなたに禁じたのよ。」ということでしょう。悪魔は「食べる」とは命じません。嘘の情報だけを与えて、人間が自分の意志で食べるように誘導しただけです。そこで結局、二人は善悪の知識の木の実を取って食べてしまいます。すると二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、いちじくの葉を綴り合せて、腰を覆うものとなりました。「裸」とはありのままの姿、弱さの象徴ですから、自分たちの本当の姿を人に見せるのを恐れ、飾ったということでしょう。人間は自分の弱さを知って、これでは生きて行けないと恐れ、様々なもので自分を飾り、守り始めたということなのです。確かに悪魔が言ったように知識に向かつては目が開いたのですが、知れば知るほど、頭で計算しますから不安になり、恐れに支配されてしまいました。

## ②【罪とは関係が切れてしまうこと】

創世記が教えている罪とは、自分が神のようになって、神から離れて生きることだと教えます。罪を法律的に「道徳に違反すること」と考えてはいけません。罪はギリシャ語で「ハマルティア」といって「的をはずす、道から反れる」という意味です。つまり神様という的からはずれて生きている状態をいうのです。その結果として認識が歪み、自分と他人を傷つけるという罪悪を生み出すことになったのです。悪魔は人間に、十戒の第一の戒めを破らせたということでしょう。するとそれ以下の戒めを破るようになるのです。罪は何よりも神との関係を失うことです。この後、神が園の中を歩くと、アダムとエバは神の顔を避けて、園の木の間で隠れます。神がアダムに「どこにいるのか」(3:9)と尋ねると「恐ろしくなり隠れております」と答えます。ここに初めて「恐れ」という言葉が出てきます。木の実を取って食べたことを問いただされると「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」(3:12)とエバと神に罪の責任転嫁をします。ここに神との関係、隣人との関係が破壊されている人間の姿があります。神から遠ざかり、共に生きるべき人間に対しても孤立しているのです。交わりがないということです。4世紀のマカリオスは「地獄では人は互いの顔を見ることができません」と言っています。

●夏苺郁子さんという精神科医がいます。彼女は統合失調症の母に育てられ、青年期に精神病を発病し、不幸の原因を作った父母を殺したいと思うようになり、いつも鞆に包丁を持ち歩いていました。それもできずに、二回自殺未遂をし、助かっても良かったと思えませんでした。人生は不公平です。過酷な体験はその人の人格に影を落とします。そんな彼女の心を救ってくれたのは「普通の人」でし

た。患者さんから「夏莉さんの人生で、いちばん助けになったのは何ですか」と聞かれ、彼女は「それは薬でも医者でもありません。人との関係です」「人の力が、薬でも治せなかった私の頑なな心を少しずつ変えていったのです。」と答えています。そして『人は人を浴びて、人になる』という体験本を出されました。

人との交わりが回復してゆくことによって傷が修復されていくのがお分かりだと思います。救いとは神との関係が回復すること、人との関係が回復することなのです。神との交わりが始まることであり、人との交わりが始まることなのです。私たちは救いをそのように考えます。いくら病や貧困から救われても、神と人との交わりが回復しなければ救いとは言えないのです。10人の重い皮膚病の人が癒され、その内一人だけがイエス様の所に帰ってきた時、9人に対しては「清くされた」と言われたのに対し、その一人には「救った」(ルカ 17:19)と言われたことを思い出しましょう。

### ③【命の木に帰る道】

最後に、3章22節で神は「人は我々の一人のように、善悪を知る者となった。今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある。」と言われ、アダムとエバをエデンの園から追放し、命の木に至る道を守るために、ケルビムと炎の剣を置かれたとあります。ケルビムというのは最高位の天使です。

「我々の一人のように、善悪を知る者となった」というのは神の皮肉です。人間は知識を手に入れて神にでもなったかのように思っている、ということです。核兵器を作る知識がありながら、自分の怒りや恐れをコントロールできないのですから。知識では人は救われません。「今は、手を伸ばして命の木からも取って食べ、永遠に生きる者となるおそれがある」という言葉は不思議な言葉です。命の木の実を食べると永遠に生きるというのです。罪を持ちながら、命の木の实を食べると永遠に生きてしまうから、命の木に手を伸ばせないように、エデンから追放したというのです。だから人は死ぬようになったというのが聖書の考え方です。神は命そのものですから、神からの分離は死を意味し、神に帰ることは命なのです。教父たちは「人間が死なないようにするのは、人間がもともと持っている力ではなく、命の木に与ることによってである」と言っています。つまり罪を犯さなくても、命の木を食べなければ永遠に生きられないということなのです。

私たちは今日、讚美歌で歌いました。「神の国の、命の木よ、贖いの神の小羊、」これはキリストを指しています。命の木とはキリストのことなのです。その命の木であるキリストがこの世に来てくださったのです。人間の方からは、命の木に近づけないからです。そして最後の晩餐の席上でパンを取り「取って食べなさい。これは私の体である」(マタイ 26:26)と言われ、また「私は、天から降ってきた生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」(ヨハネ 6:51)と言われました。キリストの聖体こそ命の木の实なのです。キリストの十字架の死によって神殿の垂れ幕は裂け、ケルビムは退き、エデンの園は開き、人間の罪は取り除かれ、命の木に至る道が開かれました。私たちは神の元に帰り、

命の木であるキリストにつながり、永遠に生きる者となることができるようになったのです。

●私は先週の日曜日に聖餐のパンとぶどう酒を口にした時、はっきりと分かりました。「人は誰であっても、自分の力だけで罪は赦されない。キリストの血と肉によらなければ誰も罪は赦されないのだ。プーチンも私も変わらない。一人の罪人に過ぎない。プーチンは大変な大罪を犯しているが、私たちも罪を犯したのだ。彼は罪人の兄弟なのだ。ある意味この世界がプーチンを作り出したのだ。」

人は人と人との間に違いを作ろうとします。「私はその人とは違う。夕方五時から来て1時間しか働かなかった者と朝から働いた自分を同じように扱うのか」と労働者は文句をいいました。しかし神は、同じ賃金を与えたと聖書に書かれています。神は悪人の上にも善人の上にも雨を降らせ、太陽を照らします。神は皆同じだと言われます。祈っていると、考え方が横ではなく縦になってくるのです。横は違いを設け、壁を作ります。縦は神の目でこの世と、人を見るようになります。そして「主よ、私たちの罪をお赦してください。私たちも人を赦します」と祈るのです。「私」ではなく「私たち」と祈るのです。人類は一つの家族なのです。家族が犯した罪をお赦してください、となるのです。世界中の人が街頭に出て「反戦」のカードを掲げて声を上げています。それと共に私たちは神に祈りましょう。悪人はどうしたら悪に気づくでしょう。自分で気づけるでしょうか。私は神の恵みと働きによらなければ無理だと思っています。光に照らされて初めて自分の汚れに気づきます。晩の祈りに「マナセの祈り」というのが出てきます。マナセ王は旧約聖書に出てくる王で偶像崇拜を行い、罪を犯しました。彼はその後、精神に異常をきたし病んで荒野をさ迷い、神の憐れみによって罪に気づき、回心してこの祈りを書きました。だから、神の霊が働いて罪人が回心するように祈るのです。私たちの祈りは自分のためだけでなく、全世界の人々の救いのために祈っているのです。私たちは皆罪人です。でも神は私たちを憐れみ、信仰を与え、神との交わりを回復させて下さいました。決して自分の力ではありません。この恵みがすべての人の上に働くように祈っていきたいと思います。